

ヤン・シュヴァンクマイエルにおける《触覚》について

日大総研大学院(院) ○遠藤 琴美
日大生産工 森山 茂

発表要旨

チェコの映像作家ヤン・シュヴァンクマイエル (Jan Švankmajer, 1934-) の諸作品には、独特の、日本人には表現しかねるような《触覚》があり、また、この身体的感覚は、シュヴァンクマイエル作品の理解において重要な手がかりとなる。

シュヴァンクマイエルの作品は、映像 (アニメーション・実写)、コラージュ、オブジェ、ドローイングなど多岐に渡るが、通常であれば、これらは《視覚》的作品であると言える。しかし、シュヴァンクマイエルは、1974年から実施された「触覚の実験」、それに基づいて1983年に共産主義下のチェコにおいて地下出版された『触覚と想像力』から現在に至るまで、一貫して自身の作品、自身の芸術における《触覚》の重要性を主張し、「触覚は、まさにすべての感覚のなかでもっとも現代芸術の機能に適した感覚である」とも述べている。

この《触覚》とは、ユーロ・アニメーション全般に観察できるもので、日本のアニメーションには希薄なものかもしれないが、その点では、シュヴァンクマイエルの諸作品は、やはりユーロ・アニメーションのジャンルに属すると、ひとまず考えることができよう。これは《触覚》、《触れる》ことを拒否しないヨーロッパの伝統、すなわち「握手」、「抱擁」、「キス」などのヨーロッパの伝統に彼が帰属し、その伝統を、ある仕方で破壊している (実際に人を動かすのではなく、粘土・クレイや、石やモノを動かす) こと、すなわち《触覚》のデコンストラクションに、彼の最も顕著な特徴が表われていると言える。それは、一言で言えば、一種の〈異化作用〉である。

ロシア・フォルマリストのヴィクトル・シクロフスキイによって唱えられた〈異化作用 Alienization〉は、シュヴァンクマイエル作品を最もよく説明する芸術理論の一つである。シクロフスキイによれば、「石を石らしく見せるために、異化作用がある」とのことであるが、真の意味を理解すれば、これは芸術のある本質的一面を捉えていると考えられる。日常的に存在するものを、日常的に示したのでは、なんら芸術的感動を喚起するには至らない。日常的に存在するものの、非日常的側面が示されるとき、人は驚き、そしてそのいくつかは芸術的感動に昇華されるのである。

シュヴァンクマイエルの手法は、本質的にこの〈異化作用〉によっていると見るべきである。たとえば、彼の作品「肉片の恋」(1989)は、2枚のステーキ用の肉が、アニメーションによってダンスをしているように見せるわけであるが、これはそのアニメーションの力により、愛し合う男女がダンスを楽しんでいるものとしか見ることが出来ない。このことによってシュヴァンクマイエルが証明していることは、恋愛を描くのに、生身の人間は必要ない、無機物であっても、われわれ人間の認識作用にはすでに「恋愛」のパターンが組み込まれていて、それに類似した、そのふりをした動作を示すだけで、人間の認識は「恋愛」を想起せざるを得ない、ということなのである。

本発表では、この《視覚》によってもたらされる〈異化作用〉による《触覚》(正確には疑似《触覚》)作用について、ヤン・シュヴァンクマイエルの作品から、具体的に考察する予定である。

A Tactile Sense in Works of Jan Švankmajer

Kotomi ENDO and Shigeru MORIYAMA

ヤン・シュヴァンクマイエル
Jan Švankmajer

1934年チェコ・プラハ生まれ。チェコの映画監督。映像作家。シュルレアリスト。

国立芸術アカデミーで舞台美術と演出を学び、ラテルナ・マジカなどで舞台美術家・演出家として活躍。1964年に最初の映画「シュヴァルツェヴァルト氏とエドガル氏の最後のトリック」を制作する。1970年にシュルレアリスム・グループのメンバーとなり、ビロード革命以前には、皮肉や風刺のこもった作風により、映像作品の上映禁止や台詞のカットなど数々の検閲を受けた。現在に至るまでシュルレアリスムの闘士として、映像作品だけでなく、コラージュ、オブジェなどを制作している。

作品

「シュヴァルツェヴァルト氏とエドガル氏の最後のトリック」 *Poslední trik pana Schwarcewaldea a pana Edgara* (1964)

「石のゲーム」 *Spiel mit Steinen* (1965)

「アッシャー家の崩壊」 *Zánik domu Usherů* (1980)

「アリス」 *Něco z Alenky* (1987)

「肉片の恋」 *Zamilované maso* (1989)

「ルナシー」 *Šílení* (2005)

他、多数

参考文献

ヤン・シュヴァンクマイエル, 赤塚若樹編訳, 『シュヴァンクマイエルの世界』, 国書刊行会, (1999).

ヤン・シュヴァンクマイエル, くまがいマキ+ペトル・ホリー編訳, 『シュヴァンクマイエルの博物館』, 国書刊行会, (2001).

赤塚若樹, 「ヤン・シュヴァンクマイエルの触覚の芸術」, 『夜想35 チェコの魔術的芸術』, 35号, ペヨトル工房, (1999), pp. 44-55.

巖谷國士, 『シュルレアリスムとは何か』, 筑摩書房, (2002).

ヴィクトル・シクロフスキイ, 「手法としての芸術」, 新谷敬三郎+磯谷孝編訳, 『ロシア・フォルマリズム論集』, 現代思想社, (1971), pp. 108-137.

クリスチャン・メッツ, 『映画と精神分析』, 鹿島茂訳, 白水社, (1981).

ジョルジュ・バタイユ, 『エロティシズム』, 酒井健訳, 筑摩書房, (2004).

Hames, Peter(ed), *Dark Alchemy: The Films of Jan Švankmajer*, Greenwood Press, (1995).